

日本歳時記

冬秋



門金曾  
775  
277

野季申奥秋

# 國朝佳節錄

發古今米發

浪華書肆森田永興齋梓

## 日本茶時記卷之五



### 秋

俗言律曆志云秋分時節也物皆斂之  
公分用雨則云秋分白元之云秋分秋分也  
秋分日長夜短於此以前日長夜短於此以後日短夜長  
秋分日長夜短於此以前日長夜短於此以後日短夜長  
の中日のむあま



素問といふ秋三月は元氣平しく天氣以て名ふ地氣  
以て明あり早しく外志多し秋分半籜と伝ふせよ  
志として外寧に秋分と後し秋分と收  
斂と外斂と平と外志と外ふする  
秋分と肺氣と平と清とむけ秋分の毎日  
所は秋分外志の遠なりこれと違ふ時外志と外  
秋分と外志と平と清とむけ秋分の毎日  
秋分と肺氣と平と清とむけ秋分の毎日

古以来論のいふく秋の末秋の初葉と云ふ其時

衣とぬき裸裸として涼と貪らるゝなれば五臓の脬うらう完  
皆背より舎しやれとく人として廟みやうとめく風と取又東  
より足と家かせバ風背より入中風の涼となり切きこれ  
とけしぬり疾しやくつるものと覚さるハ八味地黄丸はちみじやうわんと服  
せし二白にひやくと忘わすれる葱そう蒜さん  
月令廣義げつれいくわうぎいしく梅三月收斂して夜揚純じゆん騁しゆうする半  
ありき

撰生論せんせいろんいしく秋氣を燥そうなり宜く胡麻こまと食してさ  
れ燥と潤す

養生論しやうじやうろんいしく定衣とさる本甚くやいとのハ目疾或  
瘡痛そうとうと厚あつふ新穀初しんこくしよと熟じやくたる時老人合あれとくハ  
宿疾しゆくしやくと殺す本草ほんそうより新米しんまいたちと地食ちじきハ風氣と初

いしくり又早はや縮ちゆくの半熟せる時さうてやさい米とハ香  
美なりとそれと宿疾しゆくしやくと殺す瘡痛そうとうとさうと純脾  
胃じゆんひとやゆゆハ新穀しんこくとてハ服はくしてわさうと

月令廣義げつれいくわうぎいしく秋布あきふきく老人稍やや足あしのむゆれ事と足  
ハ微大みづかと用もちく足あしとあゆあゆり大おほいせやせひるるかれか  
ううととき化くわのややひとぬん小兒せうじむとぬく火ひ小せう向むかうす  
撰生論せんせいろんいしく旅りよのる定衣じやういと水みづとのとあせたる衣いと衣いと衣いと衣い  
令れい廣くわう要やう界がいいしく秋九十日會あきくわじゅうじつくわい秋の肺はいと食じきハ  
李り車しや取とりてく古こ人の云い秋薑あききやうと食じきりぬれぬれれとて去き氣  
と信しんややむ晦くわい房ぼう淫いん録ろくとて秋薑あききやうハ人の天てん年ねんと天てんハ  
とろ落らくりし孫そん子し魏ゑいとてくハ九月くわがつハかく薑きやうと食じきる  
去きるると眼がんと去きるると筋しん力りきと減へんす

七月

太平御覽

七月

立秋ハ七月の首月也。是ハ七月の中。○七月の吳名。按月孟秋涼月。律と夷別くハ○七月の和名と久月ハ○七月七日を九日

第三十一 荆楚

歳時記曰 七夕

婦人結 六日 沐浴

七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

七孔針 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

或以金銀鍮 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

石爲針 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

或詩曰 迎風披絲 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

陳瓜果于中庭 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

乞巧有喜子網于 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

瓜上以爲符應 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

周處風土記曰 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

月七日重此日其 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

夜灑掃中庭然則 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

中庭乞願其舊俗 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

于又魏時人或問 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

董勛云七月七日 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

爲良日飲食不同 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

於古何也勛云七 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

月黍熟七日爲湯 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

數故以糜爲珍今 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

北人唯設湯餅無 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

復有饌矣葦氏月 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

錄曰七月七日曬 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

曝華衣無虫崔寔 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

四民月令曰七月 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

七日作麪合靈丸 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

及蜀漆丸 蒸經書 七日 七夕と云又星夕とも云ふ。荆楚歳時記は七夕

Handwritten notes in cursive script, likely commentary or additional records related to the festival of Tanabata.

然也

古文前集張

文潛七夕歌

曰河東美人

天帝子機杼

年年勞玉指

織作雲霧紫

綃衣辛苦無

歡容不理帝

年年勞玉指

憐獨居無與  
娛河西嫁與  
牽牛夫自從  
嫁後廢織紉  
綵髮雲鬟朝  
暮梳貪歡不  
歸天帝怒責  
歸却踏來時  
路但令一歲  
一相見七月  
七日橋邊渡  
事父類聚曰  
桂陽成武丁  
有仙道謂其  
翁曰七月七  
日織女當渡  
河諸仙悉還  
官第問曰織  
女何事渡河  
答曰織女暫

伏後遺集小徑酒云實家

河之思地行二千三百里而至此年一水之流

初後獲集之米園白在名臣

いん秋心魂好行や七言あゆまうひりむとよまむ

新後獲集之米園白在名臣

まればより宿もあしり七言あゆまうひりむとよまむ

七夕の日の杜牧

雲階月地一色。建抵經年別恨多。最恨明朝洗車

雨。不教回脚渡天河。

又 蜀都原

雲階月地一色。建抵經年別恨多。最恨明朝洗車

雨。不教回脚渡天河。

又 蜀都原

詣牽牛世人  
至今云織女  
嫁牽牛也  
齊諧記  
今按我朝風  
七夕曬書衣  
陳氏食變與  
太平御覽合  
又兒女楮葉  
書和歌進書  
女近於曬書  
乞巧之意

孟蘭盆 翻譯名義  
集曰孟蘭西域之  
語轉此翻倒懸盆  
是此方貯食之器  
三藏云孟羅羅百味  
式貢三尊仰大衆  
之恩光救倒懸之

又

織女牽牛雙扇周年一度過河來。言天上婦

お見は勝人間去不回

○今日索麵ととと牽牛り十節記といじり高辛

氏乃女子七月七日死す七盡鬼神なり今瘧病とや

中むすの存日はぬよ麦餅とありゆまて死日よ何

たりと索餅と云くその盡とある後人の日索餅と

云く瘧病といれん

ははたりたりと云くす且瘧病外風定異匯の

感し内飲食色慾は傷とて痛とあり内傷も夏

傷は暑秋は瘧瘧といえたりとれはよく瘧生せはの

づりりとのとありんたといひ此日索餅と食したとて

空名義我當救倒懸  
器時萬乘之國行  
作政民之悅應法  
師云西蘭言訛正  
云烏藍波拏  
此云救倒懸

佛說孟蘭盆  
經一卷西晉  
三藏竺法護  
譯

事文類聚引  
孟蘭盆經略  
曰孟蘭盆供  
目連比丘見  
其亡母生餓  
鬼中即以鉢  
盛飯往餉其母食  
未入口化成火炭  
遂不得食目連大  
叫馳還白佛佛言

汝母罪重非汝一  
人力所奈何當須  
十方衆僧咸神之  
力至七月十五日  
當爲七代父母現  
在父母厄難  
中者具百味  
五果以著盆  
中供養十方  
大德佛勅衆  
僧皆爲施主  
咒願七代不  
母行禪定意  
然後受食是  
時目連母得  
脫一切餓鬼  
之苦目連白  
佛未來世佛  
弟子行孝順  
者亦應奉孟

病根改よりけりおぼその夏とまぬる年けりや決  
ておれり世の人けりあまを信すらん  
○今秋二星と名くそく因果と傳ふお念物とまき香と  
そふ羊のくりに立ふ糸とつゝねなくとく男子とく女  
徳善福といのふおれと乞巧奠とまき或衣服と曝  
書とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
にけりまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
又七人早ふも向うけり奇と辛の糸の糸と夜ますりて  
瓶の糸とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
昔の糸の糸とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
乞巧奠の事年けり風と伝はくくくはれこれ又その  
如く事けりけりけり口をくく主平勝寛七年

とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
衣敷とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
乞巧奠の事年けり風と伝はくくくはれこれ又その  
如く事けりけりけり口をくく主平勝寛七年  
とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
衣敷とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
乞巧奠の事年けり風と伝はくくくはれこれ又その  
如く事けりけりけり口をくく主平勝寛七年  
とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
衣敷とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
とまき事けりけり口をくく主平勝寛七年  
乞巧奠の事年けり風と伝はくくくはれこれ又その  
如く事けりけりけり口をくく主平勝寛七年

揚朴七々の詩  
未今幸年若若何須邀  
人間巧不道人巧  
○今日某丸と名七麴と名と  
と名月令と名と



其數多し似流  
星人魂  
今按中元供  
荷葉飯于父  
母或拜掃家  
上事人以百  
味設燈皆出  
自佛法唐太  
宗時中元設  
燈見東土爆  
竹下引事文  
類聚語中

盡牌と申して飲食と云ふ酒果とほくぬき事なり  
し又わひりや夏暮涼し七月十五日祀先祖は去りて  
く墳墓に淨すしけり此浮屠の法なりてかくの  
いふなりき事なりき事なりき事なりき事なり  
義なりき事なりき事なりき事なりき事なり  
不<sup>條</sup>用<sup>條</sup>し事なりき事なりき事なりき事なり  
飲食と云ふ事なりき事なりき事なりき事なり  
先祖の靈ありて食し事なりき事なりき事なり  
化令わき世後と云ふ事なりき事なりき事なり  
今事なりき事なりき事なりき事なりき事なり  
人なりき事なりき事なりき事なりき事なり  
九<sup>條</sup>家<sup>條</sup>時<sup>條</sup>の<sup>條</sup>祀<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なり

七月の十五日盂蘭盆の夜は佛陀より目蓮母と稱す事  
以てその母やと云ふ事なりき事なりき事なり  
系<sup>條</sup>佛<sup>條</sup>と<sup>條</sup>名<sup>條</sup>得<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なり  
中<sup>條</sup>の<sup>條</sup>佛<sup>條</sup>と<sup>條</sup>名<sup>條</sup>得<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なり  
酒<sup>條</sup>と<sup>條</sup>名<sup>條</sup>得<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なり  
承<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり  
宗<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり  
考<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり  
と<sup>條</sup>名<sup>條</sup>得<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なり  
百<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり  
宗<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり  
依<sup>條</sup>事<sup>條</sup>なりき事なりき事なりき事なり







たしとらひらぎくしけと用くまふまふとひずそ  
終るる日果しやれぬのちきやんくし合ふ付茶  
らうすしやうぬへんまもれ終りてけしうすの  
系なごそてすけりまうす一區區て同ちり紙りる  
介も妙友内しあどくまぶ成りてたあしくよ合口んお  
のししく紙りるおひねれり合ふ付まうすとい  
て紙りると下ちとよあけて紙りるのおと内区て終  
りてりるまのちおさなうまとよふんてりてりるまのち  
くしく色もくまうあちりてりるまのちりてりるまのち  
あちりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
さるまのちりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
りてりるまのちりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち

一層まぶりくぬまひくぬまよまぶりるぬくしり  
この上でめよふりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
いらけあふよあふ

立秋のほね及豊著菰苗高直の終りてりるまのちりてりるまのち  
菰苗まよふりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
菰苗まよふりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
まよふりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
たれがねがー定卯のちりてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
菰とい月の初りてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち  
菰とい月の初りてりるまのちりてりるまのちりてりるまのち

十月の末までとれじてはま橋と取あふことよ去はぬ收  
日子能七

背草ひかりと名するありては揚里の一人と云ふ事也

日と夜す床蓐をさるる氣とさるる氣とさるる氣と

やめり身み類るいとさるる氣とさるる氣とさるる氣と

て衣衣多とさるる氣とさるる氣とさるる氣と

く衣衣多とさるる氣とさるる氣とさるる氣と

立秋の月十日凡とさるる氣とさるる氣と

七月暑熱多しとさるる氣とさるる氣と

くとし後日とさるる氣とさるる氣と

ひる所を中とさるる氣とさるる氣と

沸るととたぎ沸りとさるる氣とさるる氣と

七月乃六候才涼風至中二白露降才三室陰降

の三候なり才四露乃降才五天地始肅才六禾乃登

六、おの異の三候なり

立秋宜五十六割十分取四十分割五十分おの異宜五十分

四割十分夜四十分割十分台月令度義

八月

凡毎月朔

八月

白露八月の節也八月の中八月の異名仲秋杜月橘也  
付とあるは八月の初月也八月の初月也八月の初月也

初日俗よ八朔と云今いたのよとて人よ物と送移す事

るも相傳ふといふこのよとて人よ物と送移す事

ら凡世他の凡汝なり或假名元建長外郎帝の以を

ハ半平のよとて人よ物と送移す事

よ今くこのよとて人よ物と送移す事

丹世七八年より業好より下よ俗也

是吉月 相賀與 華同我 朝特以八月 朔名憑朔賀 之優餘月 公事根源抄 曰八朔風俗 後嵯峨院帝 潜龍之時在 外戚源通方





詩篇未備借 奴繫好教黃 耳傳蕭朱無 類甚管鮑有 終焉猶記昨 宵面夢回鐘 度前

十五夜既月

事文類聚第 十一歐陽詹 既月詩序曰 月可既既月 古也云云月 之為既冬則 繁霜大寒夏 則蒸雲太 熱雲蔽月霜 侵人蔽與侵 俱害既秋之

於時後復先 於八月於 秋季始孟 終十五於夜 又月 於天 暑均取於月 數則瞻兔圓 况埃壙不流 太空悠悠嬋 娟徘徊搏華 上游昇東林 入西樓肌骨 樂之疎涼神 氣與之清冷 云斯古人 所以為既也

しんすきささぎをいふきんさきかきさうけり  
事美しきささぎをいふきんさきかきさうけり  
ゆきあつたひまをいふきんさきかきさうけり  
あつたひまをいふきんさきかきさうけり  
綱腰とさす後ふきと勝腰とさす月今廣義潜確  
執事とさす後ふきと勝腰とさす月今廣義潜確  
は日本の八朝の後義とさす月今廣義潜確  
○今日 禁裡より 將軍家より物知り又 ねんをさす  
此秋の法所とさす月今廣義潜確  
十日明東の法所とさす月今廣義潜確  
涼明渡り八月十四日未だゆき  
浪津無きあつたひまをいふきんさきかきさうけり

宣元貴明秋の法所未可也

十五日中秋とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
之のふきささぎをいふきんさきかきさうけり  
之を乃所とさす法所とさす月今廣義潜確  
以下内裏より筑紫とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
波豆米林軍とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
亡くさす法所とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
トクク法所とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
身とさす法所とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
子とさす法所とさす秋の十日の法所とさす月今廣義潜確  
八月十六日故土寄呈百感其樂有中國言解友邦

とてせし年の中ひより哥合よ秋中ゆし

世のさしはれしをてくふんい考としる神のおくふ

○今考ふ秋のさしをてくふんい考としる神のおくふ  
三五夕をしし哥人強客の略と記すくまへり林死山死他  
ふしく今秋月既既なるふたし考たのせしり世より  
詩人又今を練りしとくし古楽府よ嬌娥怨の曲あり  
清人の中秋の月既既くしとてはせと化しある所清の  
世よりしあふもゆふみらうこしにさ言勝と制しりて  
の恨よ他し月解と号しりてたとく又月解お凡と  
合しりて看月令とすしり月令度成とてすし  
秋湯簷就月詩の序云月之為歌を別集やれ大定云別  
意重大興云秋月表後人教と後代言秋秋之於時

後夏光や八月於林季如孟仲十五於東又月之中秋於  
天道何を是均取於月教何境免園没埃塹不滅大元  
供の嬌媚緬徊坊舞上浮昇不林入西橋肌骨与之  
味涼神氣与くは冷

○事言要玄月の歌よいし月老水之枯秋老金之氣令  
水性お生五の分其事何知天地間お感各以数水以  
令還取月固秋文法氣勢仗之然人誰不為情

後夏今集ふ天房の神哥

月とらん月と連しこの月のふらふの月よ似月りなれ  
新勅撰集より世達法師  
くろねと梅のさきききさぬりよふふはら月一をれ  
取れし集よ元家



何れも又休の半もさぬ  
今も集くは秋房

張景安中休乃詩  
万了秋を拭む燈燭拂き  
別。人月今宵冷眼看

劉マ競う詩  
夜は地通の月生  
添入銅壺張曉文

杜子夏詩  
後月死明鏡  
水函疑雲雪林棟  
見羽毛此時騰白兔  
直欲教秋美

邵康節の詩  
一年一度中秋夜  
中秋九夜法求波  
直須尚夜半  
要明仍候若天  
半要明仍候若天  
半要明仍候若天

○今秋願出梨と  
廣義よえさう  
又いしく牡丹を  
後一裁る半  
今日ては  
宿土よ宜く  
以その根を  
淨く洗  
一或酒と  
以て洗  
む好む

晦日 沐浴  
二十七日 孔子乃生れ  
孔子乃生れ  
孔子乃生れ

とろろく六社日  
とろろく六社日  
とろろく六社日

何れも又休の半もさぬ  
今も集くは秋房

張景安中休乃詩  
万了秋を拭む燈燭拂き  
別。人月今宵冷眼看

劉マ競う詩  
夜は地通の月生  
添入銅壺張曉文

杜子夏詩  
後月死明鏡  
水函疑雲雪林棟  
見羽毛此時騰白兔  
直欲教秋美

邵康節の詩  
一年一度中秋夜  
中秋九夜法求波  
直須尚夜半  
要明仍候若天  
半要明仍候若天  
半要明仍候若天

○今秋願出梨と  
廣義よえさう  
又いしく牡丹を  
後一裁る半  
今日ては  
宿土よ宜く  
以その根を  
淨く洗  
一或酒と  
以て洗  
む好む

から酒礼と云ふんうううの終と云ふひのううの風  
と進くと云秋は江日のなすうう本ううに平邦と八九月  
の比土地の神と云う乞と云う秋社ふらそふだんや云れ  
こもあなううう酒礼多ういんや村屋ごううの日かれ  
農高のあうう他村うううううううううううううううう  
はとひこの谷候よ財と貴う一財産とや物ううの多うと云  
佐陽吾國中の祭日只一日と用うう命せうう乞外他別  
はうううううう九月土地の神と云う角候酒をう割うう  
客よ客う一親戚部軍と云う本ううううううううううう  
ゆうやううう秋社に社候酒候と云う  
上旬よりと標ううううう  
株うう日考此先祖の神と云うううううううううううう

法氣日と云ううううううううううううううううう  
くうううううううううううううううううううううう

月才後却即と云ううう  
い月才地あうう新教と云うううと云うの書初と云ううう  
と云ううう

世月涼風耳の付今多風凉感と云う初す候風と云う  
宅中と云ううううううううううううううううううう  
候うううううううううううううううううううううう  
と云うの初年と云う高直と云ううううううううううう  
にうううううううううううううううううううううう  
秋の以後と云ううううううううううううううううう  
たふうううの土あうううううううううううううううう

取らたうらーけーをへたふらひまーいそらうそを  
そくくーソの道も苗さくくきんたごおんぶれき下ー  
紅豆のまよと收まー一朶のまよとせふくすうさき紅豆はぬふ  
ももを烈りふ能晒ーまよ入と能されてとくー一朶  
とハまもふ又凡かみまのまよと取收まー  
熟したる葉と晒し後煮し肉と剥きゆと去て收ま  
生芽と煮みおー未熟と用くゆの扱去ー凡そハ紙包  
くそりー市よりく熱せるところ取れ行ー

け月菜と採ー下芽葉おにいしく凡採根多ハ月採去ハ社校  
系能採津田海味下ハ秋採宜味実葉多各取共取熟也  
まそー二月の那もし  
くしーくしー記す  
此月竹とまれば月令庚辰六月月よ  
竹とまれば不熟と取取ら採ゆ凡半年ととりて貯

まー凡採ゆ半年不熟法らまぎの皮と去くや取の扱まー干  
と者ハそれハ水く不乾まー若る麦稗の灰けく洗くまよ  
ゆ水よく候ー乃ままを引り幹後柄夫粟木カホも若く  
け月子福の稗と收まー布と厚し紅紙と用ハ絹布と漆毒ハ  
あハそふ用多ー

此月天氣漸冷ありまろく生果と食しハ生蒜新採芥生春  
新子蟹と食するもれ又萌芽と食するもと新子蟹は六月月令  
庚辰よえん  
重宝及七載よいしくり海百陰地乃流泉と飲みかれ  
くしーく療脚軟と食せし  
八月の六候才一鶴居才二玄鳥改才三群鳥去ら羞大  
白鳥の三候あり才四雷始收才五蟄虫始戸才  
六水始涸才秋分の三候あり





則以徵之矣  
蓋神作在配

所九月之望  
見明月偶然

及之  
又兼好法師

日八月十五  
日九月十三

日者直景宿  
也此宿清明

故以為說月  
良夜今按景

二十八宿名  
為西方七宿

之一主金方  
故為清明於

理如近似然  
以二十八宿

宿直日據  
中華書七政

臺曆等  
則年年

不同當據之  
為法每年為

同者不經之  
說也是以兼

好法師說不  
可宿之

紗帽宿倚西風海眼愁

諸約月九日の詩

履齒聯翩印淺沙。山空月落帽簷斜。西風明日催

黃菊。殊之。在。菊。苑。

杜牧九日寄山寺詩

江涵秋影雁初飛。與客携壺上翠微。人世那能

笑菊。菊。苑。殊。之。在。菊。苑。

○今日菊苑の美菊すして味甘すと云て菊を用て菊

むを九月と重し。此中九日より月令廣義より

國俗今日より定夜と云く。月ありふりて此は

十三日傳俗今日月と考す。年中秋のとき。左の是れ

は八月十九日九月十三日。景宿ありて宿清明なり。所

月と説ふ。景宿ありて是れと云く。是れと云く。是れ

次は牛宿と説く。考す。又月と云く。此は牛宿ありて

す。是れと云く。是れと云く。是れと云く。是れと云く。

月と考へる。佳節と云く。此。國ふ。又九月十夜と用て。月

貴。丁。を。八月。を。説く。十九夜。の。月。と。貴。し。ぬ。れ。が。易。に

月。令。と。云。く。し。ひ。又。天。道。満。ち。と。く。の。義。と。云。く。の。目。と

用。る。り。と。云。く。と。云。く。の。月。と。説。く。と。云。く。と。云。く。と。云。く。

又。云。く。た。り。と。云。く。十。二。夜。の。月。と。云。く。と。云。く。と。云。く。と。云。く。

宰。府。を。地。と。説。く。と。云。く。英。華。歌。也。白。衣。臥。就。白。衣。の。詩。を

一。説。く。九。月。十。二。夜。の。地。と。云。く。と。云。く。と。云。く。と。云。く。と。云。く。



唐前荊芥三七なるへへく烈日よるせハ氣をすくた  
るかともんくはる耐もよく收て法よ平下

十月牡丹芍薬及竹法果木とらり極てうう十月令度

義よりんより農政令書よいんく九果木とらりゆり先  
九月の中の後樹のまりりとするて繩とひてまりりとか  
らけるうたらりともを肥土以入木と流下次年正月

よ級裁下すくふ正月の  
部小季

十月粟と收花下十月令度義よいんくち後よ粟と取水益  
れ肉よ入くくくとのと去日よるくぬと妙く冷く新  
量よ入ゆ一市粟三を流くよちき一壺よたぐ二百入る多きハ  
けく竹系とあひしと上と竹のあらりのどくは物とを  
まてまればゆる地小木の壺とらりじまにまより河氣まち

うづらりゆゆれ又冷水よ三水候一取てりりり明麻と  
様せ意よ入金下く又は此中の形人の流よハ生粟と之  
日果るくては能煮て入りり一壺よ收くとらをバ虫  
くりりて味美ゆりりり又大粟とせあく貯へさま  
粟の芽せしる市よやきとあり壺よ入すはよんちち候  
の土器を用い市よ粟のけはほく穴とあけ壺のくよんあ  
てりり海まかりの方と地よけを下芽せしるく  
こりりあり又赤ととて入る用よりうづらりまきとより

十月米穀と米貯下用多し

十月薑と冬よりかれ痲疾となる小蒜とくくハ赤と傷也  
と扱す薑と金く次紙と冬よりかれ紙と冬く金く  
らた大肉とくくハ人の神守と傷生冷の相と節



痢疾と治す

月令廣義

九月の六候廿一時鳳來賓廿二雀入大水為蛤廿三雀有英薄木廿四室處乃三候あり廿四射乃祭廿五  
草木茂乃廿六摺其威俯木乃路の之候也  
之氣早七割中分秋五十二割十分され路之早六割  
中分秋五十四割十分月令廣義

日本家時記卷之五竟

日本家時記卷之六

冬

淫書書傳房志ふいしく冬を陰あり善相陰なりはあり爾雅ふ  
冬と云英といひ口を陰ふと云と判せしはひやくと云  
ゆり云氣さむと云ひ也  
ゆりひと云と云

未原ふく冬有これと用花なり水氷を塊拵を湯以  
授の半をれり即一映く影るの必日光と結つ  
志として休すとく一匿くとく秘をありふとく  
己よゆるの所はなくとくありし如室と去温まり皮  
膚と世中本然く氣とすとすやらふ棄りひるの  
外れは有氣の意ひかるとて其元の道ありこれ違ふ  
時を骨と傷ひ去瘡願とあり生はひるとのかり  
千金方にいはく冬を天地の氣用血氣伏元の故ふ人七又  
方と命一汗と至一湯とと故泄すとす

月令廣義よりいへばその日公女を衣履とあつてのまゝ年  
はら暖氣所をいへばその日公女を衣履とあつてのまゝ年  
疾癘癘病とらむ

毒者毒者よりいへばその日公女を衣履とあつてのまゝ年  
疾癘癘病とらむ

金匱要略よりいへばその日公女を衣履とあつてのまゝ年  
疾癘癘病とらむ

月令廣義よりいへばその日公女を衣履とあつてのまゝ年  
疾癘癘病とらむ



今按我朝富家嗜茶人十月於爐上飲燕殆煖爐之意也

亥日餅 達生錄曰十月亥日食餅卻病

政事要畧第二十五卷忌

隆集云十月亥日食餅除萬病

延喜式云十月朔日祭神... 陽之... 祭神... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

今按朝

朔日... 煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

家以亥

食ひたの... 煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

上古十月用

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

猪肉意近之矣

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

按日本書紀紫峻

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

天皇五年十月丙

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

子有獻山猪

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

疎雨本草綱目時

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

珍曰立冬後

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

十日為入夜

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

至小雪為出

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

液得雨謂之

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

液雨亦曰藥

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

雨百蟲飲此

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

皆伏蟄至來

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

春雷鳴起蟄

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

乃出也今按

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

月令廣義亦有之

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

初の亥日... 煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

煖爐會... 十月朔日祭神... 陽之... 祭神...

寮より西玄徳ともありあさるれいりていさくありは玄徳を

実子勝の名あり（未詳）根原元元要略又実子の徳七條の

粉と合く徳七條の粉とを大立（大立）角豆胡麻（角豆胡麻）栗（栗）

ありし當中唐ふんえたりやう本と下よりけりては日民間よ

いりやう徳と對そとてぬい本とのほりうとてやうとて

んくは徳元式よのせられはたうりりりりりりりりりりり

年山唐りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

平朝のむくくとかりりりりりりりりりりりりりりりり

うたふ歌林で事物語なる但るの國よりけりりりりりりり

にやまりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ろりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

よる十月を実の月よりて実の用りぬるのい子と二年の月の

教ういりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

せははいりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ありりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

よ実の日の應りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

とりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

とりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

抄より小月今廣義は其の書成りていりりりりりりりりりり

とりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

子とりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

事一申す一様より一なる人々同下

十五日下元乃節と号し月十日と上元と七月十日と中元と  
十月十日と下元とこれと三元と号し其の法なり

時日 沐浴

け月去るありこれと浴白と云和居よ何ゆと拜十月令度義ひんく  
周俗之冬の後十日と入候し小言おて出候人 未時珍の後  
等信日これ又朔日と云と云と一儀する申物あり  
云一之改改よおんあつた候

け月紅折と云て皮と刺本津にうつぬと又茶も茶とひすひて  
日小晒一本皮と云うひすまう茶も包て茶をひひし梨子  
と收玉下し梨子を收る法梨子と教顆茶とひて梨子一  
顆より一しと云うはらるる氣のあつたまはくよはた風

定ふあつたひ月令度義のんをとり又控せり大梨と云  
らひ其茶と云うる茶菊に捕紙小包て收る茶も並に  
五深ふおと控せん板と常なる枡搦と云はくは  
と唐紙も用ゐるをとり又梨子と漆をぬれ之と控  
せん又物類お感忘ふ梨子と收る茶菊とひてぶと梨  
子の竹合もやうにすれは事と控せんと思ふより  
け月乃茶茶菊の中実したると並にす一十月よりこれ

中元

○菓葡萄醜の法 葡萄 細粒 石麴 塩 糖 大根と云  
之日小作一之後細粒と塩麴と一つよ合せ梅の皮を足  
茶菊と云うる茶菊と云うはらるる氣のあつたまはくよはた風  
け法一と云ふ







授日之長短  
冬至後比常  
日增一線之  
巧雜錄

易曰雷在地下中復先王以是日閉關商旅不行后不省方  
白虎通曰此日陽氣微弱王者承天理物在率天下靜不  
復行後杜刑微氣來者物也伊川易傳曰陽始生甚微  
安靜而後去在後之象曰先王以至日閉關朱子曰一陽  
初復陽氣甚微不可方初

○今日應と製と故人好復多と河之陽復と望す丁又  
先征考此の蓋希と却と柔は公るる新果とすむと  
○今と云乃日積進以火ハ瘟疫と去と候淨書後成  
志とんえとり鏡と積とを本ともしとて火とともる  
枯も実とあり心の如し

天時人奉日未備冬之陽生未刺綉五紋添弱保  
吹散六爻初九灰岸客持脈將舒柳天守備定欲放

梅之為不殊鄉國吳友見且復告也

○その日の後十日房半と云下と連生海ふんをりけは  
人力の氣と如くひろ免とくともて世下と以て是  
あるの根平とす下と素問と云冬不究精去必瘟疫す  
又その日の後者十日嫁娶すべし

十五日 孟子の率せし日なり  
山堂肆考云孟子周赧王二十六年  
正月十五日卒即今十一月十五日也

晦日 沐浴

予々々國の曲辰民は月九初の丑の日田神と祭るとして浴會とて  
又その脈とさうちて胃中何もうて飲寡一人もさう本  
何り色その比よりさうさうんさうんん賊乃胃後の  
女々々田の神とのいひて何との神並と祭るとして本  
去々々予とりのうと未禱とつらうと始と耕化のものと祭



小豆を味うる者棚の下乃らとをこれの上の棚下り端付  
合をくさうやうに入せると志け八厘紙とをくさつておく  
やめり柑種を稿と收りしけれ柑を空稿より採りて  
控せれ丸稿取と收りしを内守ふさむう一又茶ふをつく  
つるは又物敷お蔵志とを合稿と收り茶豆の中へ入る  
久しと控せれ柑と收りしを又茶ふ物を入乾さたる物めとて  
おひひてくさくさ

入種餅子合稿下り茶豆製法一終

○種餅子の製法 柿のあるその方とをくさくさぬさかこ紙を  
ひろく口とあられあひひり  
たれあひひりあひひり 茶豆も厚もよく洗ひよくぬすむと乾す  
とてぬ糖とくは乾すう合せ胡麻胡桃極実をく入てとて  
ふかせ合せ玉のう茶の干版と細末とをまのうをさふひ

事おとす一ると今くすう合てむう

或幸記とこの八砂糖と  
去く胡椒と薑と加へ

右の

とそと柿の内へはを乾入蒸籠中へむし乾熱したる時取  
むし日よる一乾すてお志のようたる時よく茶豆とをけ  
写留はくま蒸籠一乾く日よるしてさうのうさうと  
またはく風吹ふよゆくと蒸下丸抽下丸抽の破ぬ  
加ふさうは又さうん種んも右のうとさう

○合稿下りの法 合稿の大方とをぬお留をくけめと  
いうさふあけをひんと白ふりて蒸入はとよく封  
風ひくさうやうの収法

○大柑お留の法 種人おとこさお留をくけめさぬとさう  
ほもさうぬふたさう蒸入さうとて封法

○枕下りの法 枕ふさく穴とあけさうお留をくけ漬し

わりのりくつを

月菴菊とまゝにたりくつをまの用小油之ー茶と二三の  
くつをまの方と切すく苞小入屋中に細壺或苞よ不入  
赤さうりまにらくるるあめから怒うよよとこも少く  
下糸とまを帯とまうて苦味と切くし苦味とま  
氣ぬけておくを虚くあつ又は月菴と蔓草の根とま  
りて煎すつづつめく煎す煎す煎すのりーま  
ままぬく初あめのはきんつろけま月の比りりーく  
壺よぬぬとまうく下く小壺うあつ又は月菴のまとま  
下くま菴菊の根を根を小壺とまー又菴と蔓草とま  
煎す煎す煎すく一五日日ありー煎す煎す煎す  
はよ末焙に漬くときー

東洋に上り仲冬く月菴菴  
ま日菴天を乾く為職道あり

月令よりく月也日経之法湯煎法生瀉君子齋戒又必掩  
刃欲寧心也林語類事欲飲以約陰陽之而定  
月令廣義よりくまのあ後を十月菴草と行桂すく益天地  
の氣閉塞して養生氣とくあすあす死行とくゆる  
むさく

月令菴草と名をく人々とくあ病せむ瘰癧肉とくハ氣  
とくくハ腎膏の肉とくハ人々とくハ思ふとくハ生肌とま  
くくハ清血とまじむはまうて甲のあつ法物とくハ事  
勿れ神草と称す尸虫と生す漆腫とくハ事勿れ也  
ハ眩暈法病とくハ下む生葉と名をくあ病とくハ  
生葉と名をくあ也清血とまじむ又老火とくハ腹背と何  
あつり勿れハ不培肉を食く次

月令廣義道生八脈  
男貴業書等下を

十一月の六候才一鷗旦不鳴才二虎娘交才三荔挺出  
 右大雪れ三候才四白地州結才五麋角解才六  
 水泉動才七玄の三候あり  
 冬之立才十七刻才二十才東才二十二刻才二十四才大雪与芒  
 經及對 月令廣義

日本書時記卷之六之七

日本書時記卷之七

十二月

八日 太平御覽二十七

荆楚歲時記曰十二月  
 八日沐浴轉除罪障

臘八粥

事文類聚曰  
 南方專用臘

月八日灌佛

皇朝東京十

二月初八日

都城諸

大寺作

浴佛會并送  
 七寶五味粥  
 謂之臘八粥  
 本朝臘八粥名  
 溫臘粥見三水

十二月

而して小定して中と大定して○十二月の月名を季を凍月 臘月  
 繼と大定して○十二月の月名と志をいへば傍とじ之佛名と云ふ  
 あらひを伴と云ふをあるふとせりる所除をせりる所除をせりる所除  
 あらひを伴と云ふをあるふとせりる所除をせりる所除をせりる所除  
 月八日沐浴轉除罪障

朔日 殷乃伐之建旦の月と兼首とせりる今日から殷の

正月元日あり國俗この日と云ふ子朔日と云ふ子の内ちとを應

と製し初年ありそのはよりそとけり年や其の二年

乃る年なく朔日と云ふかそ月を年と初をさす

八日ありて臘八と云今日富と云て自洋と云す下

家付記の十二月八日從臘酒を富祿と云り兼富

と云つるをともうの風俗あり

あすの風俗通し顯現氏子あり黎と云すねと云

記等

除夜事文類聚

曰昔顓頊氏有

三子亡而為疫

鬼一居江水中

為瘡鬼一居若

水為翹翹

瘡鬼一居

人宮室區

隅中善

驚小兒

為小鬼

於是以歲十

二月命祀官

時儻以索室

中而驅疫鬼

焉東海度索

山有神荼鬱

壘之神以禦

山鬼為民除

害因制驅儻

之神云云

見山海

後

漢禮

樂志

月令大全臨川吳

氏曰難者聚眾戲

劇以盛其喜樂之

氣使人之和氣充

盈則足以勝

天地之厄氣

此亦先王燮

理之一事而

敬ありて以て電神とすくはるるをれかといふ  
 にて小夜神と電神とするあり又為るをれ  
 其は是れ神皇正統記に二神今人のあふ電神と  
 りとあはれこれすかち我 國の電神也  
 ○今日水とぬて壹をふの形を一收へふ小瓶中貯水  
 本年治一切の疾病割製念臘八日水を神なりといふ  
 月十日初四御涅槃の日より被邪偏の周禮五十二年二  
 月十日御涅槃の日にしり周の儀を十月と以て衆  
 旨とるはふ二月八日の十日よりとるは今二月十日  
 日とりりく御滅日とするをあまされ  
 ○上旬或中旬の中極月の節みく多く米以春貯  
 して以て二月の用とるしとるしにしを春米とく  
 賑ひ米以春く貯を半りくしん  
 元氣能田樂府席日余居石胡近米田家得兼言十  
 変採其酒名賦一詩以減凡土其一名春貯臘日春米  
 為一氣計多而衆許白臘中畢事苑之土瓦倉中  
 貯年不壞名を春米 出千事  
 ○十日の後屋中乃煤塵と掃下煤塵と掃は女人  
 多く初日とて恒例の形とて或風の多はれ  
 幼日小物とす十日の後凡るは暖日と用下  
 國書小澤志と以て臘月廿四日每家掃塵を何れ  
 中々再ももるしとて又初日と掃くといふ  
 古は後のりといふ  
 國俗は月中旬より後乞食を掃掃して  
 乞食といふは又掃掃して膳と毒の馬帽子と毒せきといふ  
 皆難之遺  
 意



炒豆 本草曰辟  
穰時氣以新布  
盛大豆一斗納  
井中一宿取出  
每服七粒佳 領

本朝除外校  
妙豆或食之  
出自此義

附庚

申說 二十六七日  
凡庚申之夜  
不寐待旦者  
太上感應篇  
曰有三尸神  
在人身中每  
到庚申日輒  
上詣天曹言  
人罪過不其

註三尸在人  
身中每至庚  
申日與身中  
七魄上詣天  
曹言人罪過  
乃其職也按  
經所說脩真  
之人先當絕  
去一云三守  
庚申三尸伏  
七守庚申三  
尸滅守  
者不寐  
也不欲三尸  
得以言其過  
也抱朴子內  
篇卷之一微  
旨第六云身  
中有三尸三  
尸之為物雅

回祿還若老與衰 抄くたはるの小序小蜀俗家史河合お趣呼ぶ別

又瑯琊代醉海ふしく流人景書家人家集曰波敷は  
ホの流と考えれらるるも景志よみたるの傍あり

○は月下の午乃日けりて上臈を併けり波敷と一  
毛もちりたる二年のうらふ何のまき沈音に和して  
燒その灰と念よ入りて沈沈とせむ

大空の帝の内より別下應と地り今日午始に用あるを  
製るへ一臘水とて應と製するは味知りてくよは應と  
性なり取りり然も氣初より今日教る應より望  
破なり取りり製るへ一は但大空の内より製るへその望  
日より水より流るるなり元應と製るへふりやも

酒氣あるを酒米とて一又かき米とあるはくさよ酒米は  
酒ありてたふ初一は酒ふりて流るるなり酒のり用  
ひへくくありて酒氣をさくはひを黒と用れは應ゆる  
くさく者まはなれて用になすはつて酒ふり  
まらるる酒と用へり寸碎酒のより粉米と書するなり酒  
書にたふる酒とてかきまはる應の酒とてかきとて酒は  
よりにはたふりて酒をさくはひを黒と用れは應ゆる

二十八日 辰種と合ひ

○醫林集要辰種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風  
各五分 川烏頭 白朮 菝葜 各二分 大味 劉寄奴 絳囊に  
とり除目に井中小掛應ふ沈め元旦より取ち一晝夜  
よ酒ふ浸り少煮し東より向くこれと飲後に晝夜を



無秋而實魂 靈鬼神之屬 也欲使早死 此尸當得作 鬼自放縱遊 行饗人祭耐 是以每到庚 申之日輒上 天自司命道 人所為過失 脩真捷經卷 之二云三尸 神名彭琚好 車馬衣服彭 質好飲食彭 矯好冠帶與 人身同生能 興三業欲人 速亡又曰凡 遇甲子庚申

切忌夫事共 寢食務 在清淨 則三尸自滅 矣通生八牋 載守庚申法 一卷今略之 今按守庚申 者道家修行 之法也上引 太上感應篇 等之言以明 其義非佛法 故陸菴卿上 人事范曰守 庚申事出道 家非佛經所 出乃當知非 佛法矣亦非 神事故當原

井中小すりを乞と服すは六尚年瘧疫と不病

○又方 本草綱目はく陳定之小方云善治方也 元且欣之辟疫癘一切不正之氣 赤朮 桂心 各七分 防風

蜀椒 桔梗 大黃 各五分 烏頭 赤小豆 各五分

十四枚 三角の律憲要これと入るを右におれ

赤木ハ蒼木あり柱ハ肉柱の皮あり

○又方 出干月 大黃 桔梗 川椒 白朮 桂心 各二分 烏頭 炮去皮胸 豆 菜萸 防風 各一分

○本胡房種方 白朮 桔梗 山椒 防風 各二分 肉桂 大黃 半

○白散方 白朮 桔梗 細辛 各二分

○峻嶂散方 麻黃 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五分 己上三方典藥頭魚安信濃方也

○は日之の繩をけり除目の用也

後古々君をふりて家言をかく國老友を親戚の家

○屋中及宅中を弄く押注し門松と立てて上小洞連

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

○今水と除虫とふと除々をいふ一年乃おる取ふも六

道真公庚申夜  
述所懷詩曰為  
客以來不安寢  
眼開豈只守三  
載文草大江  
國後歲暮於藤  
少侯書齋守庚  
申詩序云夫去  
三尸學九轉  
者彼太聖之  
玄風也載江  
集上道真公  
匡衡者我朝  
宿儒也守庚  
申之說不過  
如此則非神  
事昭然矣又  
閱西宮記禁  
中有庚申御  
遊賦詩歌為

絲竹圍棋以  
待且供酒于  
天而已矣然  
近代寂滅之  
徒觀觀世守  
庚申此夕代人  
守庚申殆令佛  
寺為道觀其惑  
久甚矣事釋章  
者亦慕其利明  
神之傍以為誦  
祀近年往往而  
有讀書知理之  
人以為何如身  
柳道家守庚申  
古人猶且議之  
事文類聚曰有  
朝士夜會終南  
太一觀拉師同  
守庚申師作詩

頌而教謂之が兼けふ年の終るをわれのからむ言  
事なり又佛家も今來は凡のくをわとして玉まの  
るべきとすうく被思行よんえはれを存居の  
込をれを傷すの任用を今に何し守

○今來は麻以凡上及夜而電上た香を燃く辟邪祛  
淫宣符氣助陽法又外宮小祀を燃く具よくは所系  
炷と燃く燠く炭薪多く燃く夜中光明行を陽  
氣と燃く又夕夕を最ん氣と和吹く去く下人を呼  
ひふれ思と夜く氣と傷る事ある通命辟く神  
と換り事ある通淫然を燒じじ一月令度教をえんを  
○今年中へ家へ用何ますその業を今夕中夜に焚ハ  
疫氣避く四時暮業おにんえたり又今夕茶末とまぐ

焚ハ疫氣と避くを生保くえたり

○從小治く今宵仇をえたり仇をえたりは昔の  
の世に土月晦日の一あふんえたりとむらり  
今昔殊來進退をえあれ今宵その本とむらり

を水豆とちりて悪鬼とあせくるは後同をり  
山ふんを悪鬼の束縛するは林市中もむらり人法  
陽寮をいんとして上下以下と進と知る日ありて  
おせりもきり面とさくもふんく不ことをもつと  
内裏の四つとまもるあり又殿上人を御殿のこた  
まて祀のら葦乃矢少くいんふんをさくとして  
をちりて鬼としてらふるもまれもやとえんを  
柳道家守庚申の事武帝文云之年天下は疫疾  
而此を祀地土牛大儼すこれありあり又新子の奥  
傍に谷津菩薩池の色小方丈の完けり藍屋也

日不守庚申亦  
不疑此心良與  
道相依玉皇已  
即知行止任汝  
三彭說是非此  
詩可以辨千古  
之惑矣

とて二匹乃鬼也却小つる言より咄めつのはき何れ  
とくさるちの別當字の帝に奏しこれ法家  
法をまじく早九家乃物とて方丈の穴を新し  
三石三斗の豆とて鬼の目とてちよほ埃裏抄  
まじりゆき不化の毒液なりわらき詠の奴とて  
その色れと何んそらんそらんこれやぬれぬ  
寂とていふとて感のやうなれし周禮礼記  
器ものやうにそれより後世の禮儀志も  
るれ好交の進の儀衛々東京賦小洋なり又  
丸を穀とすころにまじり後序古の原ふ  
穀の中にまじり今 國俗をまじりし  
おんやいん鬼とていふ義あり源氏物語  
多しなりといふ追とていふことありていふ  
人いふことありていふことありていふ  
ことありていふことありていふことあり

又 國俗をまじりし鬼とて福をまじりし  
あやふく人の訪ふ深奥のまじりし  
形相擲亦法方鬼眼精とてこれ大を投て  
鬼の眼とてまじりしすまじりし  
ついでこの本の鬼心  
鬼すまじりし  
○今世いふのやうに大戦と行ふは  
くまじりしとすまじりし  
日統小まじりし

ふれ下しとあうの書小把笈畫鶴畫神帖分を結  
とれ出鬼と名せく志まのうしゆれをのれあう  
○扇座と今日より井の中のほし主し一季のあふけ  
除笈新除取の詩ふ

一杯兼酒をる妙味看新年の上質増共也柳花明  
日を水餅お射不気味

又高適の詩ふ

旅彼宅を龍猫ふ眠客心何半轉凄然在郷今宵思  
千里秋聲大明初又一年

又方秋屋の

欠与柳花把一杯研題帖字等春本須更使是の  
年。本。為。以。宅。音。一。併。用。

又王禪の

今東を宵去明年の日催宅改一和去春色五文来  
氣也元中改客影暗完催風光人不覺已焉後園柳

古今集より喜道列樹

ふれ下しとあうの書しゆれをのれあう  
後振を茶小為系基後

いづくもと形と何うかぬかおしこふかるとの年を  
ひ系集より重徳市園の家肥度

さねと不敵身のをとなつ物と何ゆあぬのこふと結む  
堀門百そよ國行

何半と結も月し明をてこもふふあうまう  
二取手

つねといふまゝにその原ふまゝにたれやうぬらん  
○は東嶺の形と圖とて枕ふ加えゆれぬ意と書くとて  
今の世居るまゝのまゝに信じてゐるを意と今も教むら  
ぬれと用ひしなり

拙りゝゝ嶺を雨流小せり流洞及竹とくゝ唐乃  
自居るゝ嶺屏乃梵此序よいく象鼻屏月  
牛の尾虎足寝其皮西溼圖其形也邪今俗語之  
白澤又陸佃がてく皮を性也外禱別有神胎也氣  
これの皮と云くは俗に邪言と云ふ物なるを言  
は事とすらるゝと意と今もいふまゝに用ひしなり  
又ゆるす但依序書よ大猷の時伯奇といふ神念意と  
まゝのゆるゝはこれと辭の本なり一はまゝに睡中の

思ふして形つゝとのやうにぬれと今もいふまゝ  
とくゝは此本をゆゑに世俗の人畫の意を和意と稱  
せん一口の之を千倍万倍とていふまゝにぬれと  
ありやくありゝ東の意なり西の意なり事はさうも  
りとして巫俗に記してその意とまゝにぬれとす  
ればあつたりとすははるゝはゆるゝ人の言ふ癡人  
の面ふふ意と伝へるゝとすははるゝはゆるゝのせい

礼意のりは用礼乃古意列すゝ意の反意也  
義舟流序朱子と朱子の意の反り考ふなり

○又と東記と畫と禱乃下ま禱るありこれ禱退之の  
送客文よなりをりも也といふ人も何世と利欲にぬれたるハ  
其後の通意も道ハ恥たると後と我家ふ入るるといふぬ  
がみ意ふなりともその本と今もいふまゝに後のかゝるまゝに

後小婦人女子のたがれけりてたまはるるの事なる事あり  
○世傳よまはるるおね乞人あふりて危押ひくくよま  
聖年危小何る事の人殺とありて何ふまば祝詞とあり  
とくり小鶴の鳴まぬとす京歌或母の母まはし都まはし  
これとん押人女子のたがれけりてたまはるる事  
まを何る事危世傳よ危と男かありて年教ふりて  
凶災何る事とてこれけりて七年ありて年小ありて  
たふあふひ小神小いけりて何ふてその災とまぬま  
事とありて小信巫のともさうこれとまらうて民の  
とつらむる事とてゆまねとて年中再の事よ  
んてりり年の同記もさうとていひうとてそのめは  
あるとてや但内押よたまの年とていひて事とて

りてあまの年とて七歳より九歳と加え十歳と加え  
まてとりて七歳十歳二十歳三十歳四十歳五  
十二歳六十歳九歳と加え九をを端の教あり  
陽極れかまはるる事ありて何ふとていひて  
い事母事とありて何ふとていひて何の年と母事とせ  
よとていひて教とていひて何の年の事とていひ  
りて何の事とていひて何の事とていひて何の事  
とていひて何の事とていひて何の事とていひて  
とていひて何の事とていひて何の事とていひて  
何の事とていひて何の事とていひて何の事とて  
何の事とていひて何の事とていひて何の事とて

りろくふハ冬迄の後すとの成の日と臘口と号し一日津と  
まろく又右の重を質つ民小切ありとまろくし一洋書家  
あるをより又乙種宝典ハ臘ハ先程とまろく蜡ハ  
とある同日にりて吳糸くと何

小定々定々十日のる今世後小定の中と稱すはら小食  
草物と製すといハ其の性より久しくたくりて控せ  
以此時刻すち物下り記す

○乾薑と制すり法 母薑と定の中の名に一七日或  
四五日ほしと取あげ皮と去り小干貯す

○山茱とくく之貯す法 け山とくくし年比  
さ葉乾とくくハ鋼刀少く皮と去りて米粉とふ  
るひけふつてぬき乾乾より鉄と名

○糯米と粒米と原米より法 一日あり漬し一日ハ乾すぬ  
けすり七次許く浸せハ米氣ぬきとあり糯米と味  
て腹解く粒米ハ飯と粥とて病小用ハ世病とて  
腸胃と補てん飯と名

○粒米と乾飯とすり法 粒米と多く臘水小量日ほし蒸  
乾しとじし曝乾とく瓶ハ貯置し用と時熱湯と漬  
せハ米小飯とあり粒とく胸腹小不塞甚可く縁ハ  
の時布小包てこれと沸湯ハ扱すれハ包小飯と名  
用送巾箱中不可取付也

○糯米の粉とあり乾すり法 上白粒糯米と市のとく臘  
月の水と浸し毎日ありと三日とく石臼とよく洗ひて  
石の米と磨しありとくすりのうにそと一滓とハ

赤石印少々磨してみこすや其に梅入あを加え一煎立  
てほろりと云々のごとく毎日水と攪く水乾すの三日を  
て後綿布の新袋よたの粉を入りてあて去板ふこき  
てよく水取して半日ほど置かす候へば又この多をれ  
あまろくし又袋あてりてよくこきつゝよくこきつゝよくこき  
袋よりとりりりこき袋を口ふりあ乾きたら時又こまに  
こりて乾干ます候へばよく乾きよく乾きよく乾きよく乾き  
ころやうにすし用所ゆるくこめて解し熱湯を掛りて  
後水小ほりて食し或は湯汁をく再煮て食し又  
赤石印の煮てくこき候へばよく食し甚はよく性熱  
泄痢ともしめ脾胃と梅末を掛りて再煮て用し他  
宿食氣滞ありてよく用し候へば

○赤石印とあ乾す法 赤石印とを中煮煮くす候へば  
袋よ入りてよく乾干し候へば一煎と乾干して出  
用ても扱せん是月も應解のく不用してはよく候へば  
用やす候へばとす  
○臘水少く糖と割りて煮切て二三日よくして後水小ほりて  
二三日候へばよく食し或は湯汁をく再煮て食し又  
入煮し煮候へばよく熱湯を入熱湯の内よく通ると湯の  
中に煮て候へばよく熱湯と次或よく煮て候へばよく熱湯小  
頃よく米豆粉と煮し用ひ候へばよく候へばよく性熱よく  
氣と不塞若くよく候へばよく二日水と攪し二  
月より毎日あて候へばよく候へばよく候へばよく候へばよく  
あ



○臘ろうを少く申まを割わきすくくして換かせぬ凡た末ま替かを豆ま瓜か考くりたる大豆まを原は水みを五ご斗と入いれ合あひのお皮わううに急いあるまて火かとて蒸じて後のち火かのきえ次つぎ井いたさすて釜かのきえか能のち止とめて乳ちを液えきりやうしりうと煮にひた合あひをすくして汁じは能のちに名な能のちくありて耐たえか火かとなさめてあてえど一ひと白しろくしてよくはくたのは少すくてを飲のみ明あけまほしても同どう一ひと煎せんりかあのもよく煮にせりてはじかすれか大豆まの汁じを煮にてうすにゆるぬまおるの味あじは  
まおる大豆とに白扁豆と一釜、  
 二斗粒入る煮ぬ味換せし

○白末しろ替かの割わき法は 大豆まを石い皮わと去い水みは後のち一ひと蒸じ一ひと熱ねて上う白しろの米こめ麴こうを五ご斗と或ある或ある名な入いれ五ご斗と合あひてよく煮にせり

○五斗末ご替かの割わき法は 大豆ま一斗ひと 麴こう一斗ひと 酒さけ糟か一斗ひと 米こめ糖とう一斗ひと 塩しほ一斗ひと 右みぎ一斗ひと 左ひだり一斗ひと 今いますりあうぬうハツてよく一ひと 味あじ替か性せいはく腹はら中ちゆうにうさぬ病びやう介かい用ようてよく一ひと 魚い肉にくをよと煮にく替かます

○ぬうとよく割わきす法は 米こめのぬうとあうてよく一ひと 飯い能のち光ひかり能のちひして熱あつく一ひと 耐たえ火かとなさすてよく一ひと 煮にせり文ぶんつじり耐たえぬ一ひと ぬう一ひと 石いを二ふた斗と平へい平へい并なら替か替か池いのきを入いれ白しろくを能のちつじりませえしけ温ぬる氣きのあうとよく一ひと 煮にせり一ひと 柳やなぎをよ能のちくしはぬ少すくいとよく煮にせり本年こゝろ正月しんげつのち一ひと 又また白しろく入いれつじりてよく一ひと 煮にせり入いれ下くだす

○又また法は ぬうとあうてよく一ひと 大おほ豆まの煮にせり内うちに能のちはるわとよく一ひと 煮にせり一ひと 柳やなぎをよ能のちくしはぬ少すくいとよく煮にせり本年こゝろ正月しんげつのち一ひと 又また白しろく入いれつじりてよく一ひと 煮にせり入いれ下くだす

かきしりしりあり白くつくした水と塩をいれ  
白くばら合せえ何を柳小瓶にてしきよ入しり  
まかり塩をいれよれんまよれし二法のうしれと  
へて味多せん息臭ぬる良法なり腹中不氣滞り食滞り  
くはる病人の用なり

○厚匙と塩漬する法 厚匙等の毛とぬきよく腸と去  
洗りぬ毛抜せんろのち腹小塩とてい入又よしも解け  
まの塩と多くここ入又おも塩をよく付足つてささこ  
つ小結合せさささふゆりて一敷とけハ塩のれとちり多  
く後紙よつてここハ苞ふつてけりまけまけし法なり  
たふ塩漬の法めばなり

○塩漬の法 海綿と紙とまきり塩と多く湯を柳小  
瓶にめのかきしりしりここ入又おも塩をよく付足つてささこ  
くまひりりして紙のりしとまきまけし又薄紙包てまきり  
とよしけ付しとのこくにしてこも包紙とてまきり  
くかきけて一日下よまけ下小瓶にて塩のれりしり  
何つてまけまけし或赤紙包てまきり

○魚を糟漬の法 魚をよ塩とけりしり一日敷ま  
柳小瓶にめのかきしりしりここ入又おも塩をよく付足つてささこ  
くまひりりして紙のりしとまきまけし又薄紙包てまきり  
とよしけ付しとのこくにしてこも包紙とてまきり  
くかきけて一日下よまけ下小瓶にて塩のれりしり  
何つてまけまけし或赤紙包てまきり

すけり物さくは或はあとかやうけり

○猪神宮の伝とす法 大小切り骨と去ほは  
れさきうううなふはぬき干し後おじきの  
屋下あつりさけきり本紙つゝこのとこしよ  
つゝさきううはほせは物面の時ふ出さ

○乾大根とす法 小室の初り蘿蔔の皮と削り根の  
末よ各小繩の面う穴とあけ小繩を巻いて風をさるとこ  
らつれ口裏およかけ立て大室の終りまで九十日をよ  
こしきまの目え入てるのあつてぬおのどよけりてま  
ひり物あおおふて風味甚佳

○胡蘿蔔乃つけ物とす法 明蘿蔔の大分  
とえりて乾三日日ありとぬきこすつちを乾ききたり  
こすふは後てより初りこすはつれぬまてて破り久  
くこすえん牛膏もまこすつけぶりてより

ふせ候ふより茶中の中交とせりて急と振すれ口舌  
とたからぬえりの人よ中交と教片に切りて臘月の  
多にサリ入りつけ立たして熱湯小教を泡すれ毒  
去りかくのこくにして性かすれ百早しとおれ九寸  
交と泡すりあは熱湯の熱さめて甘交もひえて後え向け  
又熱湯よ入しゆせされ毒さる

室中の香水と貯まし一者ハ穀の精英臘月よと收め  
量よ入る平なるもの地中にうこしことよたにむひ  
風面の不後やうにすし丸臘膏水の功用甚大に能一切  
の熱疾及痘疹痲痺等の瘡毒辟除時疫と治し目疾

とせしこれとて酒とゆり磁と化れ味甘美し  
久し堪えしにて解肉とほせ五月と換せし又穀百果  
乾蔬の種子とほせ八月多くして虫とせせす日  
了す蓋て六畜の痲疫法病と治じし月今廣義  
ふえり又いしく臘言水まで室今麩とのうに考て  
去物柳池木の妻とすれ不忠

臘月よまぬる香池と化れ恐すれ法書不入膏菜に用  
て神効あり婦人の治ぬれは髪更く光りて凡此生せん  
多く乾て解菜の用いし一飲食茶味よこれと用て  
功他池よ倍れ又臘月の徳勝とし乾貯て膏菜は  
今午一し一月今廣義ふえり

凡刀劔銃戟等とこころ十月より二月までのるんごと  
あの性よくよく補生せん好小室中といよく良とす

柳の皮と切くまきのふ池小柳は根とせす

け月思を夜と納ましこれと五月茶のよく実してのめハ  
癩疥と病す

冬月甚寒しして病乞の老衣すく刃冷て海丸し或冬月  
あふ房て海丸すり何し四肢すくは微氣のハ先  
と去らる冷衣と脱去く常人の老衣暖る衣とこのく  
これとつて何れも米と物換りて袋に入ん上と厨子に  
米ひゆと又他の袋よ物換りたる米と入く厨子  
或大とたきる電の下の焚灰と用りしり  
刃温ふり日用氣回て後或薑湯温酒粥ふと何れ  
保者すしとをん上と温すして大といてあづり冷氣

大氣と多しくを死す又煎黄柏研末を分と用てまじ  
其の眼角に懸てす

便物志ふいしく十二月甲寅の物と合すいふあとの類  
なり月令廣義いしく櫻肉猪花肉生椒と合すと忌  
家小輝と果菜と合すなりと悲と多合す次凡物  
の心肋骨と合するなりと書業書にいしく蟹と合  
するなりと害す牛肉と合するなり神とや方物  
と食するなりと神氣と換す蚌蝦の類と合するなり  
道生ハ歳ふいしく一月の辛巳と合す他月これと  
合ハ病成るなり

損軒の記は新書の中は逐月の食物禁忌と説  
との多し毎小来月某物と合ハ某病と生れといふ  
程法陽家の拘忌と説くこと詳よき御存を記す  
むそふ気といふ古の方書よし言さる西流  
家本草小治と載ざるもの多し考く候すなり  
ソウエこれ今言ハ新書の記をよき載て  
人の披閱小便すその可否ハ人人の擇てこれとい  
候すなりとの

十二月の六候才一層如郷才二鶉如果才三雉始能才小室  
の三候あり才四鶉如乳才五仙鳥属疾才六水澤  
腹堅才大室の三候あり  
十二年十二月子子て七十二候あり七十二候の  
辛八月令及呂氏春秋注有子等よ出たり  
十二月登東乃割穀小室ハ与小暑及射大室ハ与大暑反  
射之 月令廣義

日本家時記卷之七尾

最時記之附之初部祭事記之寺社之祭礼之  
忌事之半有先生之選之文小畧之

貝原先生編輯 日新堂藏版目錄

和漢事始 和爾雅 初學知要

初學詩法 和字解 日本歲時記

鄙事記 日用良方 未刻

五倫訓 未刻 日本釋名 千字類合 貝原翁門人 鶴君玉訓点

續名教

六  
博桑歲時記書

文比十一  
六十一  
七  
ホニ日字竟

中村直道

我朝月命之義語大者政事要略江家次第等書是也語小者公事根源抄年中行事大槪等類是也余嘗為二三子著公事根源抄義此佳節錄者有人舉通於士庶節令問源起故引證漢家本朝書間加今按以應從容之求云爾  
負享戊辰孟夏念五  
西峯松下見林  
跋

佳節錄歲時記雖有詳畧皆年中之行吏故實也  
名有使但索給考索加首時冬化十五  
日  
中村直道

